
円舞曲と月と廻る猫

宴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

円舞曲と月と廻る猫

【Nコード】

N 6 1 1 2 P

【作者名】

宴

【あらすじ】

徘徊癖のある高見悠也

彼は月夜の散歩中に喋る猫に出会う

猫の話の内容とは？

序章：廻る猫（前書き）

月と猫と人がメインで書きます。ワルツは関係ある・・・かな？
完成は2015年をめどにやります

もしかしたら「死」の描写を入れるかもしれないのでR - 15入れました

序章：廻る猫

月が綺麗な夜だった

普段夜中に散歩する癖のある自分が、そんな日に散歩かないわけがない

月に誘われるように放浪へと向かう

目的地なんてない自由気ままな散歩

――

しばらく歩いて河原へ出た

月の方角にふらふらと彷徨った結果だ

風の音はなく、流れる水音、草を踏む自分の足音

静かな夜だ

時刻は11時頃だろうか

昼間では決して味わえない景色

そこには何もない

そこには静寂がある

――

土手に腰かけてぼーっとする

そのまま、自分の存在感を薄める、セカイに浸る

自然のなかに自分が溶け込むように

ただひたすらに自分という『個』を希薄にする

自然と自分が同化する、自分が景色になる

彼、高見悠也はその調和が大好きだ

壮大な音楽を聞かされた時の鳥肌を感じる

切ないアニメ、ドラマのシーンを見せられた時のぞくぞくする感覚

それら以上にこの調和の感覚が好きなのだ

思わず吐息が出る

闇と月光のなかで、その白さは良く映えるなと思った

――

しばらく水の流れを眺めていたが、寒さが身に凍みてきた

そろそろ帰ろうかと思い立ち上がる

高見はふと気付いた

猫だ、猫が隣にいる

今の今までまったく気付かないでいた

いつからいたのだろう

いくら暗くて、さらにぼーっとしてたからといって、手を延ばせば届く距離だ

猫に気付かないということはあるだろうか

「お前いつからいたんだ？」

動揺し、つい話しかけてしまう

返答を期待などしていない、投げかけるだけの質問

そのつもりだった

そうなるはずだった

「ああ、その質問はわかりづらい・・・」

低く震える声、そのわりにはしっかりと聞き取れる芯のある声だ

高見は驚き、慌てて周りを見回した

誰もいない

「私にも不明であると答えておこつか」

また声が聞こえる、前にいる猫を見下ろす

「今の声はお前か？」

高見は猫に言葉を投げかける

「問いかけておいてその態度か・・・人というのはなかなか解せぬ生き物だ」

猫から言葉が返される

高見の頭はついに理解が追いつかなくなった

猫が喋る

非日常であり非常識

そして非現実的だ

驚きすぎて声もでないというのはそのとおりだ

せつかくスツキリさせた頭が、すぐに混乱で埋まってしまった

もう一度あたりを見回すが、目の前に猫が一匹いるだけだ

その猫は自分の方ではなく河の方向を向いて座っている

月が明るいので、黒猫だろうというのはわかった

――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6112p/>

円舞曲と月と廻る猫

2010年12月31日06時51分発行